社会人類学

長島信弘

広義の「人類学」は、生物としての人類を扱う「形質人類学」と、社会・文化を扱う人類学に大別される。後者はヨーロッパでは「民族学」、アメリカでは「文化人類学」、イギリスでは「社会人類学」という名称のもとに、それぞれ独自の歴史をもつが相互交流も著しいものがある。

日本では、第二次大戦以前は「民族学」の名称で用いられ、現在でも文化人類学者、社会人類学者を含む学会の名称は日本民族学会である。この他に常民文化の研究を目的とした日本民俗学があり、学際的交流がある。

第二次大戦後、昭和二七年に文化人類学（東大）、社会人類学（都立大）の講座が新設され、その後文化人類学は講座あるいは学科目として各地の国立大や私大に新設されたが、社会人類学講座は昭和四一年に本学に新設されたものが国立大学では最初で後に琉球大学にも新設された。

本学における人類学関係の講義は大正時代に既に行われていた。『授業要覧』に依ると、大正一〇年に本科では「人種学」、商学専門部では「民俗学」が開講されているが、講師名は記されていない。大正一一年になると、桑田講師が「民俗学」（本科1、2年）、「民族学」（本科3年）を担当し、大正一二年から一四年には同講師によ

る「民族学」が開講されている。『要覧』には記されていないが、大正一五年卒の松本正男氏によると、後に台北大学で社会人類学的研究を行った移川子之蔵の講義があったということである。大正一五年から昭和二年にかけては民族学は休講となり、昭和三年には授業科目表から姿を消す。

昭和九年に民族学は第三部第二種選択科目として記載されるが休講のまま昭和一六年にいたる。昭和一三年以降は「将来開講スルコトアルベキ科目」とされている。昭和一七年には再び抹消される。このように、戦前における本学の人類学講義は大正末期に限られていたのである。

戦後の本学における人類学教育は昭和三三年を端緒とする。この年、西村朝日太郎早大教授が前期に開講された「人類学」を、石田英一郎東大教授が大学院、社会学研究科の「社会の環境と文化」を非常勤講師として担当されたのである。後期では昭和三五年に「文化人類学」が開講され、大林太良東大講師、蒲生正男明大教授の来講を迎いでいる。以後今日に至るまでの変遷を前期、後期、大学院の別に記しておく、

前期

「人類学」(一般教育科目)

昭和三三年—四七年、西村朝日太郎講師、

但し昭和四一年には蒲生正男明大教授が冬学期を担当されている。

昭和四八年—五四年、西村講師と長島が夏学期と冬学期を分担、但し昭和五二年は長島の海外出張のため富田守お茶の水女子大助教授に非常勤講師をお願いしている。

昭和三三年以来二一年間本学の人類学教育に貢献していただいた西村講師に対しては、昭和五五年五月、高

橋安光分校主事が特に謝意を表している。

昭和五五年からは、先史学と比較文明論を導入するため新たに加藤泰建埼玉大助教授を非常勤講師に迎え、長島・関本による社会人類学入門講義と併せて、一層の充実を計っている。

後期

社会人類学講座が設置されたのは昭和四一年だが、専任教官として長島が着任したのは昭和四八年のことである（四七年は埼玉大学と併任）。講義は昭和三五年以降の「文化人類学」が昭和四五年に「社会人類学」に改称され、大林太良講師が二年間担当後長島が引き継いだ。但し昭和五四年度は、亀井孝教授と長島による特別講義「言語と社会」を以ってふりかえている。昭和五一年にはさらに「社会人類学総論」と「社会人類学各論」に分離された。この年は関連科目として「アフリカ社会」も新設されている。昭和五六年には関本照夫講師（現助教授）が着任し東南アジア民族誌を、またその後ロシア語の坂内徳明助教授がスラブ民族誌をそれぞれ担当することになった。

「社会人類学総論」は昭和五一年より隔年に開講され、昭和五七年からは関本助教授が担当している。

「社会人類学各論」は昭和五一年に開講され、昭和五二年には長島の海外出張のため吉田禎吾講師（東大教授）に講義をお願いしたが、以後は長島・関本・坂内により、毎年開講されている。

「民族誌」は最初長島による「アフリカ社会」の名称で昭和五一年に開講されたが、昭和五六年に関本講師が「東南アジア社会」を開講するにあたり、講義名を「民族誌第一、アフリカ（長島）」、「民族誌第二、東南アジア（関本）」と改め、昭和五八年からは「民族誌第三、スラブ（坂内）」が新設された。

「アフリカ社会」
昭和五一年、五三年、五五年、長島
「民族誌第二、東南アジア」関本照夫講師
大学院（社会学研究科）
昭和三三年――三八年　石田英一郎講師
昭和四四年　大林太良講師
昭和四六年　長島信弘講師（埼玉大助教授）
昭和四七年以降隔年長島信弘助教授（現教授）

ゼミナールは長島の着任とともに（昭和四七年）後期・大学院とも開かれ現在に至っている。昭和五六年には関本講師のゼミナールも開講された。

研究活動としては、昭和五一年度より「東アフリカ、環ヴィクトリア湖地域の総合社会調査」のプロジェクトを組織し、文部省科学研究費補助金（海外調査）により、昭和五二年、昭和五四年、五六年、の三度にわたってケニア、タンザニア、ウガンダの調査を行った（研究代表者は長島）研究分担者は主として他大学のスタッフであり、本学からは院生の小馬徹君が教務補佐員の資格で第二次調査に参加している。関本は五七年から二ヶ年間、カリフォルニア大学バークレー校に留学、長島は五八年から二回にわたり、東京外語大山口昌男教授を研究代表者とする環カリブ海調査に参加し、トリニダード・トバゴ国を中心に現地調査を行なった。